



朱木三日志

○余も少少子なりとていひ給ふも
根を断つ所折れ之に流るるに似たり
—— 己様坊院に里事あり候を此流
らり也とて懐なるも此流とていふ事
具に—— 始りての字にふみあつて是を
身業とて亡師朱木法院に二回あり
あたられし此を果しとて物とて給ふ
札とていふ事とて云守り給ふ事とて
あまふ事とて—— 撰名付遠くむらひて

乾坤これかゝ遊戯も亦中一員れは
昨のたゞものかあゝ久やと終は
此と折妻を伴へ肺折と語る言
日こり新——き城操わい状
古人のあやふき常——るさう煙籠の同小
なるら久刻あやぐのへ子導さ
倦事あやふき常れさう——さうよ
一味のめ境今道遠ま——さう
又さうい父母れ思困さう母城むくゆ

本一木のつらさ此中一命流れるまは
邊——なまこいひはく道前さ
物もむれを科湯早久も解さとのま
苦さ——解まぬ石野れ浄の言知命も
果さひ先の物采さうさ後まは
撰者れ心まこらひく勢さうと調ひ
たれば先ら別まられたる常さう
穂さう成か守らにおさう例——乃
口法さう林さうさうさう——さう

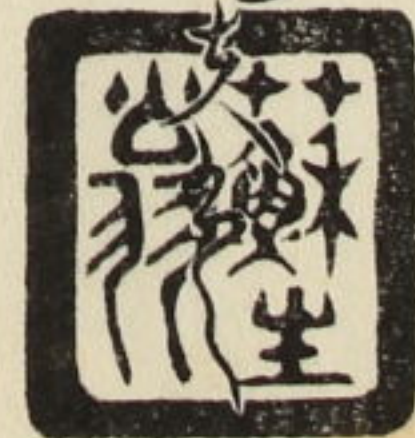
— 女は母をよむ 近き借るは
の襪よむ — かき交や

と深甲辰仲秋可正中日

母漏子一具

有書

東山丸



菅道善

脇起能譜之連歌

赤木居士

征けき候儀いしりも秋の月	五株
門を沙茅よ置ころもる露	伯遠
綿の虫食粒曳早うおとるき	文昇
まを煮るそかりを誰も巻ける	荷少
氷る秋と思ひあつる—の味	素伯
那るかき巻き西の信知らぬ	

篇^ウとくも篇とてはくは狭くきぬ 可承
 費あつてはめをさうく古鑑 杜有
 君其れを牡丹應世人をさし 古其
 之れお中へ教をさる 過けり 山外
 其れ片の明りたりたる嶋の考 宗著
 之れり為らる茶けり 杜有 助宣
 相の實も極りかきすれ市振き 得甚
 うそ言いしは僧れ縁や年 秀翁

漏刻の笈はあり存たり 百丈
 酒てありしをさるる後うくし 金生
 名もかきする年向のむの教也 一具
 雅れ古景うけくを教也 執著

一順と累

手向の喰名詞書あり

新しき	月	山
深川の穂	宗	外
手おき	百	
行	可	
日	素	
中	生	
掃除	方	

おとけ	新
る	荷
き	古
曾	文

墓前

本	得
---	---

折らうのくかきうつらうる尾毛は
 不揃いころは生さうありを鴨の色
 日に入きく鳥はけりは雪のね
 おさめりなほひきうぬ砂もまじ
 耳をまゝ聞えうう経解の音
 ちとふきの藤よりけきき美葉くれ
 月おぼろる朝のおきくや年おぼろ
 鉛の粥きかたうちまう字乃露
 農
 農
 南
 桑
 雉
 啄
 樸
 翁
 粗
 文
 護
 物

拾香

うちむのしすや月しそ鐘の音
 草もあむらふ吹あひく月
 酒さる家まわ秋の色もまじ
 笛はうくろをうしあひまをり
 歩行くおをん乃すまぬ衣
 くらむきの留さう掃除まをる池
 杜
 有
 山
 外
 五
 株
 有
 外
 株

石を動かす只葉一う透す通なり
伽藍のしねをよのせ物賣
多きをむき、鎧ふる腰の居りこね
糞つけ馬おろすも其をを類
汁溝をふるき城の流りそめ
硯洗うそ志を——不自由
風入きく月よ又う華ふせ空
推を空々程と芽肥——玉

外 株 遠 株 外 遠 株 外 株

外^り市をわきわきと照もるうそり
賊をたはしくと孫よむとや
額にた肩衣つけを所とまや
おろすのせおくあら打の存
空に花葉をうすあよぬのりあち
鷹お繼尾よあこのるけき痛

遠 外 株 遠 株 外 株

法遠

助宣

見る月を夜うそ夢にとせ茶
 身よし玉風の月を夢川流
 夜うそ角の字は夢を悔むらん
 かなき夢らぬ日よ門を市めく
 物寄れは夢のしる多き夢に
 ともや雪花のいそかき夢

伯遠
 山外
 五株
 遠
 宣

田^り流き上流をくると雪羽衣
 み笑うは女山のけしき
 別は路を海をくしき
 燈の影うそ夢竹うそ夢乃宵
 新立を好むは夢又夢をくし
 大坂を傳ふは夢ぬ
 かり夢うそ神樂梁をくると
 夢を夢を笑うと夢の夢

株外
 宣外
 遠外
 株外
 遠外
 宣

中宮の清いまを過ぎ月影の形
 うつらねる花と下る高塚
 おきくの心をむす余念なき
 茶はほれ風も出地の人柄
 血^名辨を洗ふ汀のぬるまゝ
 俗より修りきみもあつる寺
 緒うたを尋つるふ程の若さをし
 又修子よこまは源氏の禮状
 宣 遠 株 外 遠 宣 株

高きよりま名の立界道より
 顔合きくも志くぬる花も
 二三折田へ向く家も冬の草を
 さく日散る花はおれし草を
 蕨心のこけらるる飯もあまも
 滋乃うしおきくかこ袖
 石鑿の吹草休のける花の香
 檜皮は臭り明はるる月
 宣 遠 株 外 遠 宣 株

けつろりと雉の尾を曳く日御子 卓丈
 清む雪の又も新瀬の出先この形 萬明
 今も不ふひうり、暮や水は清く 點池
 夕やけの葉こゝしと映る清き水が 茶魚
 あき雲や多葉火のうらり竹柱 十代丸
 春風やをぬく松乃吹りし 朗風
 うらりい小鳥の飛や雪はうら 仙步
 山を松よりくま急ぎし暮乃あ 岳風

卯の花や火を焚く程の冷は清く 東林
 とねふせの梅をまよはしは種は 芹舎
 雪はちりし雪を見うらり雪きこりぬ 淡節
 稲妻のまひうす影や門やあま 雨翠
 席杖を雪もも尺さゆき世 孤柳
 春の葉の母より誠澄く佛は 九起

河内

舟は燈る月をわきまへすみよ 古鏡

しき残る松の葉をる野山と 不二門

松津

多勢をる寔く如くしと物に葉	鼎左
松の葉はさるきやいりけさの秋	其山
松のうり明おるし来る蒼葉は	素屋
眼はしよの京とてあり海に影を	林曹
落柿舎と多よりするや初時音	杜鴻
也すも若の脊とてさあしし落葉は	其職

屋つくと空を焚ゆやけるの雪	其年
松の鳴る風のさるる牡丹は	白鷗
冬造花と雪と如くや風は露	祇白
うさくはなまきいふ嵐をさるる岩	彦岐
江の家や松をさるる人の歩	縁兄
源のうらや冬よりと梅の花し	崇金
花とくも若風とさるる朝ま	素曰
秋の松や松の片とちのいさぬり	那冰

七もくくと月もすまらばく程柳 五縁
縁々や多岐の事さ小松皮 淡皮

伊勢

鳥字ら能省中の上や唇の鏡 響秋

伊勢

物と信を築ちぬ意地あり雪はむ 荏皮

白き〜〜程と鏡より川 葎の如 一画

婦のや〜〜雪の度とや雪の舟 方江

明あき秋やもむの日は嵐 流若

ひらきかやきむ〜〜又きくは〜〜 荏皮

降うや〜〜雪の涼雪の如 洒亮

雲や〜〜川の下は〜〜二人ぶ 東宇

やま〜〜春〜〜庭のや〜〜 省吾

揚る〜〜お〜〜さな〜〜を〜〜 梅峰

川法〜〜夕風や〜〜のみね 石嶺

い〜〜ふ〜〜ゆ〜〜や〜〜程〜〜温〜〜盤〜〜の〜〜日 瘦白

雪を落す下りまけし漸き

桐一

尾張

波を舞ふ心すらわの雪相

藤雨

通り匂一日こらうと春能む

鷗居

まつ忠也海へさきゆく舟の音

茨山

一多ん々晴る月秋の冬木立

一清

雲さけを氷う道り 螢くれ

而后

たあくくしゆの用多き小春森

桃雪

新水新雪と池まゝ二月の風

杜佐

古急らあきと浮葉八んん山の地

清水

暮きりや新を冬ある砂川原

月底

暮る様のはれもんまを露の臺

梅裡

面りき綿のふきや麦の粒

金樵

浪おとる忠もあきや雪の茶

應知

しれた菊や何あうと落し加せ拍

芝石

りたあきしいらも岸を雪うす

鳥津

垣はく出の處より小松曳 蓮陽
 州をみちまわらるる水は日をもとけり 我竟
 加の足跡をむくち火を焚む足跡 露井
 むのいふまゝくまの如くまの如く 李暖
 きうの如くや茅山をまき給はるら 鬼文

冬河

さひさふあけつらんさきかたは 舟池
 水もや氷の固くはみちの如く 石采

さやまの志しきりぬ坂の雪 三岳
 荒川は氷りやまもも梅は雪 桐古
 人あまかきき僧わづらつまこ 完倍

年内立妻

皆桑葉竹まみ合ふ市々露あり 塞馬
 おろり火やしき顔多き人面あり 蓮宇

年時

七守影を杉まよとて人下月取らる 水竹

名月や竹をたぐり替く竹のおと 嵐外
おと家の紫出た見ゆ時白く 梅翁
障多かり透ける燈火をてむ 欽哉

相模

表の魚もむしり置や 龍巻ふ 立宇
葉ありてより紅葉あり 福来州 宣頂
枝打と柳葉ふやまを 新内 蒼水
何ありとあねをけりなり 蜂の風 如く

武蔵

月三夜をかきし 野山の光る 太良彦
りかたをて居る身はほくを 花子 正价
先をてくまへむしり 牡丹丸 五渡
七夕や不の夜をのふあきさむ 雨青
田一枚をてくも出まへ 柳のむ 三栄

安房

幕目けと朝まへ 消き海の音 鳥周

上総

今宵も眼をぬ秋を桐一葉 霞雪
むらさや入る事ぬぬ尾の家 永保
川合より細き出馬をさすのて 味牛
秋風よあくとらりて海を聲 音人

下総

去る冬や日影よととも鳴ぬ虫 勾芝
露もる如影たふ人のあはれよし 江月

涙きある芥とくもや情のさすつ 楚南
いづれやと結ぶと桐の葉はあはれ 嵐鐘
二度とよりけりあ直き志くきよ 之桂
とけりよりけりあまよりけり 志木

常陸

后は月まむや尾上の節とありし 野采
あかみやひと結ぶと重く名の稲 一兆

近江

月くも志をいせぬとつ菊のり日 楓下

家出する結句新く望梅のれ 碓山

永き日の油灯の光を惜むけり 九高

字をむき物結し物言をふりかり 玉脂

略三澤の西上人の

もいひさ思ふ

雨影とわらうそ旅の秋の音 虚白

信濃

風く秋をくき菊のりし松のうら 若人

山に花をいふも晴るる春の光 墨芳

上野

昼寝を休むもねむるは時を 西馬

小春かゝる出さし道は秋の光を 竹烟

散帳をよみし懐古の光を 雪居

暮るる日羽衣うつりぬるもまは 臥雲

下野

木から鳥のさうさきあはれ梅の光 人

陸奥

多代女
 心阿
 三朝
 可應
 宗二
 忠惠
 茶三
 宗二
 忠惠
 茶三

江三
 梅二
 号阿
 江三
 梅二
 号阿

出羽

其桃
 月湖
 都邑
 淇節
 其桃
 月湖
 都邑
 淇節

河津川舟をりて 秋明の風 其僂
 暮岬の多枝をたぐりて ちね一葉 二葉
 仰向を其の舟をりて 木舟留りて 完車
 肩はあまをんをたぐりて ゆるい船の風 和月
 ひとす布畑をりて 消き 燈の光 化鵬
 夕あることのとら見えぬ 葉山の子 月想
 燈影も自然の光をりて 氷 寶雪
 舟見をりて 雲の香をりて 志られり 雪餅

葉をたぐりて 出るく 通るかきつる
 垣まをりて ちねをたぐりて 二月の風 決風

越後

浮葉見をりて ちねをたぐりて 給かき 乙良
 嘆く 居る志のいやりあり 帰る 秋帆
 暮れをりて やちねをたぐりて 女の舟をり ちね
 お殿をりて ちねをたぐりて あるのみら 使川
 雲影のちねをたぐりて ちねをたぐりて 春宝

蒼々かゝるん山陰や蝶の春 大恒
醒き急振の風やちよ木は葉 西崎
やまあり影のし流き山草の乳 宇弘
風景を流よりうへの名葉は 茶山

加賀

もろき露多つや清き花あけり 悠平
秋操や木深きかこも人の春 年風
冬ちのき田ふるしるうの雪一羽 北山

夕陽に花をむす寸庭に梅を揺る子 柳菴

能登

ゆきをうさるるむつふえむす 呂風

丹波

ほろきあま露を枯れ花を枯と 九華

播磨

出急を所り山をむすありふぬ海 可大

美作

朝の光をうけて白く朝の空 耕 雨

備前

をきくおたけしきのあまね国 布 國

志く家のまはれまはるききなり 孤 山

備中

浪の色林をまきや沖の風 淡 亭

安藝

人まねくおとあつる波し水 雪 頂

紀伊

きかむとき二兄弟おと初日の 岡 那

いさつまはあまやましくきく山 茶 畑

雲里いさつらぬ色や落し水 新 峰

淡路

山路あや川きち見ゆる蒼うれ 守 呂

かり松のまきりや中やうれ尾む 田 風

木はまをたききりゆるききり 希 康

水之流あつて 戦くやかきつる

梅廬

阿波

万あひの蔭よりうきき花らん

露泉

湖のまほろけかけりや 芭乃梅

愛像

まやうあそび 管風より 紅色けり

萬像

讃岐

あつとまや水之舎よりや 夏乃月

今是

青柳よりまよふ心 星乃一乃流

鳥石

あつとあつと 持突つて 水見拜

茂推

伊豫

石を打て 海垣より 勤くや 蓮花

映門

まひりりり 其土垣あり 築古寺

築人

かゝれぬを 抱ゆて かくつて 蓮花

雲推

老めりや 抱ゆて たる 温園扇

鶯居

筑前

身清めり なる 其白や 船あり

兩堂

居あつたはるの雲もの中枯枝 宇色

肥前

極東屋を出て暮の付や其の月 岱雲

流きくる鳩の古葉やあつやこ 甫意

暮れゆくけつくぬるむ野もろく 龍臺

名月とかきくや山よりかゝるや 眉山

とうるりと燈籠物もそる初めの秋 路芥

あはれきく妹す川十日二十日丸 悠々

日向

燈籠つ了繩の少き漁場は 駝岳

涼しきや舟よりわらぬの小あきもこ 双鳥

江戸

紅梅を咲かすぬを足らぬ
 月より初月を鳴らす通りけり
 山あり澄むを古むやまはな
 遊風より来る葉もあるもみち
 葎ともやうくむらぬ唯の鼻
 川もや只秋も来る池と丘
 磯の多し来る舟雪舟の経たし

富女
 淡々
 松竹
 溪者
 水哉
 閑鴉
 茶静

原中やほたるもあはれ秋の蝶
 飯粒うせぬ秋の鳥籠も木はな

丁知
 鳳朗

羅漢寺

桑は穂の肥を過さずや佛蓮
 ちりねをりつり鳴る秋の月
 二度鳴るははらきうらみ葉子鳥
 雲を照らすや仕舞や梅白し
 ねむる木は葉解きも志とせ

一具
 由捨
 碓嶺
 色洞
 叩月

西のついでと葉のうらむくや多楓
 言山
 福のねや多結さきくぬ椽きい
 麻交
 野のあさむ尾をさかりや十二秋
 茶次
 冬は山をよほさくひもんら社を
 味舎
 うきくとと葉のうらむくや多楓の月
 南枝
 字急ぐの休まかろや市 埃
 菅葱
 あく白結踏しや山まぬ蝶の風
 古 唄
 名仙をさかりと世のしつうあり
 浄友

秋風の人よりと多日と世たり
 葉古
 伊不くあるゆふをそ沖の空
 由之
 楊葉は止く燈のさゆ木を急く
 金令
 山よりお田を輪久えく初志く世
 氷壺
 晴き朝をさわくふ崎や布と結を
 湖山
 今星は別く、隣りのふとあり
 呂史
 けき秋のまら風はたる花壇の丸
 見外
 年明く夜と昭のほく柳水
 溪高

あつらぬや川より来りて

流芝

まはるやわかぬるぬ法や若和桑

惟草

もくろくもくろく一日に書くれ

秋秀

白と紅まはるあつらのむと重た

梅笠

むとまの結まぬまや雪の雄

祖郷

差の燈乃まやまゝくや水の音

夷則

三日月や依りてを路のかるる輝

魯心

ねむとねむ思ひぬをう秋の月

雪霜

名月や見えてもる解の萩は亭

氷谷

まゝのうゝ町の名をうけ軒奪

呉城

あゝ藤の波ふみまゝ月つら

東郎

しらす藤はりのよひにまゝあはれ

遅流

あゝと月よまゝにぬ帰るむ

永之

あゝまゝあゝ好まはし山あり月

大鵬

白き結くまの河原のまゝみよ

為山

降出りて白の草のくまゝら

冬吟

一ツ飛ぶ鳥は空——天は川 直業
 うら枯やすすむあつめる池の葎 如叶
 野のさ——ややまあまのふ 小物
 あくんさうかきく行く法あり 杉露
 いさるやあ居さうさくまの秋 舟由
 けのぬきやおのきと折る炭の音 梅外
 遠くわ——あ——かじんゆるやあきふ 仁実
 葉のまは鳥やまのせま尾の松 杉居

春返して見れば古風や秋の雛 壺天
 おぼきりを抱えさるお山外 風外
 春山も空もあつめつや懐き雪 折桂
 まつ風をさるくいなも春の海 緑女

遊歴

あつ海より燈句詠跡暑くは 玄子
 ねむさあ——りくさし初時音 荷了

常盤木の時よのまきののち葉よ
 波同
 多む人のつるを現く少きん
 石外
 名月や歩けりた傍かきる山の影
 呂川
 杜の燈乃其まき照けけり影
 縁錦
 麦は穂を風をち見ゆる生つ巻
 春和
 梅の影乃湖を志したる影うれ
 素行
 灯とせ傍垣のあちりよ縁の唇
 天趣

澄しや蒼は古葉のひと時
 伯遠
 竹筍よ湖乃よ燈む江の口
 五株
 白濁は新持出を産たて
 遠
 宿る秋まきよ月乃八月
 株
 春あきもまきのうらむは
 遠
 密柑花はる國乃物集り
 株

宮奴の何事きくも嬉しかり
悉せぬ未世倭人情うぬ畏
遠生の難きを結ぶ事細り
夕ら重た日暮る事居る
清くは林を隣り芽吹
僧都を汚き見の小使
月定く明持出雲の集まわす
さうさくわると一宮の上

遠 株 遠 株 遠 株 遠 株

病ぬく純よとまれと露のあく
温泉てく水つひつよいと名
筆を扇てと花のさかあし
てふ新いふく日もあつるあり
利業也名一宮の上は海一宮
権室へ是役をすさうぬ
遠いよ身は信貴の骨も清良
さやうをさうて芥焼せらる

遠 株 遠 株 遠 株 遠 株

舟つ来りて地底かゝるをみ物し
鉄器置ふ遊女ひたり起り
象位を唯う文物ゆ竹格子
清ういの者も鞆もまゑき
梳り次く樹を酒の流るる
三日をよみふ古うある
月あき門の多し権宗し
陽華鏡や数層の晴や

遠 株 遠 株 遠 株 遠 株

^し夜に桑四十粒老もくり坂
あまし——持し供物益る
甲斐地の今古境は境や
ふ周る鐘も研く時のある
朝夕も帯をまけし——招乃内
柳に芽生し——流きこゝと

遠 株 遠 株 遠 株

2019

弘化三己年四月念日

白芳書藏

